

英詩入門

—いろいろな詩の形—

武田 雅子

要旨

「詩はその言語の精髓」と言われる。英語を習ったからには、英語の詩を味わうようになりたいものだが、しばしば「詩は難しい、ましてや英詩なんか」という反応に出会う。これは実にもったいない。英詩は英語の特徴の詰まった宝箱のようなものだから。しかし、難しいという反応があるからには、これを解きほぐさないといけないだろう。それは、毎年詩の授業を担当してきたので、常に課題としてきたことだった。授業は最初1年の通年ものであったが、今では、半期ものとなっている。そこで、年に2回、英詩の全くの入門から始めて、何とか個々の作品に出会うというところまでもっていくという作業をしていることになる。毎年そのためにプリントを作成し、それに改正を加えているのだが、それを形にしようと、「大阪樟蔭女子大学論集題 44 号」に、概要をまとめた。次に実際の執筆に入ろうとすると、「詩とは何か」の書き出しはなかなか困難で、ためらっているうちに、別のプロジェクトにかかっているのを掲載したこともあり、2年が経ってしまった。このたび、根本問題は、他から攻めていくことにして、まず詩形について取り上げることにした。リマリック、ハイク、ソネット、コンクリート・ポエム、自由詩を例となる詩と共に取り上げた。

Limerick (リマリック)

* 規則はこれだけ

この詩形のきまりとしては、① 5行

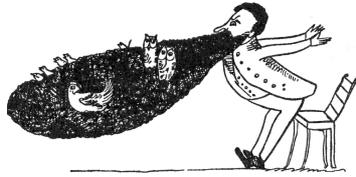
② a-a-b-b-a と韻を踏み、b-b の2行がたいてい短い

というだけですので、早速実際の作品を見てみましょう。

* リアの作品

次にあげるのは、たくさんのリマリックを書き、それらをまとめ、おかしな絵もつけて出版した Edward Lear のものです。この詩に合わせた Lear の絵を見ながら、楽しんでください。

There was an Old Man with a <u>beard</u> ,	その人なにしろおヒゲがご自慢
Who said, 'It is just as I <u>feared</u> !—	「こんなことにわしゃ馴じまん!
Two Owls and a <u>Hen</u> ,	フクロウ二羽にメンドリー羽
Four Larks and a <u>Wren</u> ,	ヒバリ四羽にミソッチョー羽
Have all built their nests in my <u>beard</u> !'	引越しおってわしゃ不満!」 [柳瀬尚紀訳]



韻の合っているところは、それぞれ下線と波線をしましたので、a-a-b-b-aの確認をしてみてください。

それを含め、上に記した①②の条件を満たしていることもわかりでしょう。

* リマリックの名前の由来

リマリックは200年ほど前に作られ始めたらしいのですが、アイルランドにLimerickという州があり、ここが歌に歌われたことと関係があるようです。でも、なぜこの名がついたかははっきりとしたことはわかっていません。Learが自作をまとめて出版したことで、この形が確立し、彼は「リマリックの父」と呼ばれています。別の形の書き出しもありますが、このLearが使っている形にならって、「There was a(n)…」や「There was once a(n)…」という表現とすることも多いのです。

* 訳でも韻を踏んで

ところでこの訳、とってもよくできていると思いませんか。なぜかというと、訳でも「慢-羽-羽-まん-満」、つまりa-a-b-b-aと韻を踏んでいるからなのです。さらには、1, 2行目は「自慢-じまん」まで、ぴったり同じ音で韻を踏んでいます。リマリックはこの詩のように、あまり深い意味は持たず、どこかこっけいでおかしなことが書かれているのが特徴なので、全体の調子を生かすことがとても大切なのです。それで、訳すときも、きちんと正確に意味をとるといふより、音が合っている感じを出すことがポイントです。詩人は、何か信じられないような、笑い出したくなるようなことを、調子よいリズムに乗せて書こうと工夫したわけですから、訳すほうもそれならこちらもどう韻を合せてみようかと苦勞し、工夫するわけです。次の、Learの別のリマリック、ちょっと韻を踏んで訳してみませんか。

There was a Young Lady whose eyes,
Were unique as to colour and size;
When she opened them wide,
People all turned aside,
And started away in surprise.

たとえば、「お目々パッチリ」と「びっくり」では「り」しか合わないから「くり」を合せるには、「お目々くりくり」にしようか——とか考えるわけです。

* 絵をつけてみれば

この詩にももちろんLearは絵をつけていますが、それは出さないでおきますので、自分なら

どんな絵にするか、考えてみるのも一興でしょう。

*リマリックを書いてみよう

さて、逆に、韻を合わせばいいとわかれば、自分でリマリックが書けます。次の空いているところを埋めてみましょう。

There was once a princess named Meg
Who accidentally broke her _____.
She slipped on the _____
Not once, but twice.
Take no pity on her, I _____.

Haiku (ハイク)

*ハイクと俳句

「ハイク」って日本の「俳句」？ そうです。日本では俳句というと老人がやっついそうなイメージがありますが、アメリカでは小学校でハイクを作る授業があるので、ほとんどの子供たちが「ハイカー」と、「ク」のところを強く長く発音して、知っています。これは、子供が詩となじむように、先生たちが「自分で詩を作らせてみよう。それには日本にたった3行で詩になるハイクというものがあるから、それを借りてこよう」ということになったからです。

*世界に広がるハイク

日本では5-7-5の計17文字で1行と捉えられることも多いのですが、アメリカでは、それぞれ1行ずつ全部で3行と考えたわけです。日本では、たった17文字の中に一瞬を切り取って、それでいて複雑な思いを込めるのはとてもむずかしい、そこで俳句はかなり高尚な芸術であるとされていたのですが、アメリカではたった3行書けば、それが詩になる、簡単だ、子供でも書ける！となったのがおもしろいところです。このように一つの文化が外国に入ると、受け止められ方が異なってくるということがあり、これは文化の輸出の興味深い姿の一つです。ハイクはこうしてどんどん世界に広がって、今では世界こどもハイクコンテストがあり、日本の子供たちも、日本語で作ったものを英語に訳してもらったり、海外で身につけたりした英語でそのまま参加している場合もあります。テレビで、四国の松山に世界中から子供たちが集まって、俳句を作る行事があったことを、放映したりするようにもなりました。俳句は老人のものだと思いついていた日本人も、そうだと子供もハイクを詠んでいいのだ、そこにむしろかえって新鮮な見方が出てくるかもしれない、と気づいたのです。輸出したハイクが、再輸入されたというわけです。

*子供の作ったハイク

では、そうした子供たちが詠んだ俳句を見てみましょう。

Small fireflies at night 夜に小さな蛍が
 far and near spreading its light 遠く近くその光を広げている
 to fight the dark night 暗い夜と戦うために [フィリピン 8 歳]

On a sharp morning 厳しい朝
 Robin said, come and get warm コマドリが言った「温まりにおいでよ
 In my snug feather 僕の気持ちいい羽根の中に」 [イギリス 9 歳]

* 5-7-5 か 3 行か？

さて、日本語の俳句の場合、「ふ・る・い・け・や／か・わ・ず・と・び・こ・む／み・ず・の・お・と」という風に、文字を一字一字数えやすいのですが、英語の場合は ‘cat’ は一つ、‘basket’ は ‘bas-ket’ とシラブル (syllable) に分けて二つと、数えるのはそう簡単ではありません。それで 3 行のハイクを作るとき、5-7-5 とシラブルをきちんと数えて作ろうとする場合と、真ん中の行が他より長ければよろしいとする場合と、それはもうどうでもよくてただ 3 行にすればよろしいという場合と、いろいろなケースがあります。

* 俳句・ハイクの中の自然

俳句は四季がそれぞれの趣きを見せてくれる日本という風土の中に生まれたので、「季語」を必ず含むことになっています。気候や風土が違う外国ではこうした季節の言葉を必ず入れるというのは無理なこともあるでしょう。でも、季語を入れることによって自然を詠むことになり、自然、そして自然と人間の関わりを詠むという、ハイクにおいても欠かせないポイントになっています。

* 渋いハイク

それと、ハイクはなんといっても短いので、その中に一瞬のエッセンスが鋭く捉えられるということになります。そうすると、子供のためのものというより、次第に大人の文学になっていき、日本の俳句の境地のような英語ハイクも出てきます。

heavy morning dew— 朝露がびっしりと降り
 whitetail deer scatter 尾白の鹿は撒き散らす
 mist in the meadow 草地に霧を [Wally Swist]

これなどは「露茂く」とか「露茂き」とか始めて、5-7-5 で日本の俳句にして訳してみたくなりませんか。

* 「古池や」を英語にすると

ところで、日本の名句もたくさん英語に訳されて紹介されています。文字数を数えるときの例として出した芭蕉のかわずの句はなんといっても有名なものなので、多くの人が訳しています。明治時代の俳句の革新で知られる正岡子規、それに小泉八雲の日本名で「耳なし抱一」などを

発表したラフカディオ・ハーンの訳がありますので、大きな違い（行数やダッシュなど）、さらには細かな違い（‘the’ や ‘a’ といった冠詞、単数複数、時制、ピリオドなど）に注意してみましょう。

The old mere!

A frog jumping in

The sound of water

[正岡子規]

Old pond – frogs jumped in – sound of water.

[Lafcadio Hearn]

次のように訳した（？）人もあります。

AYE, THE OLD POND AND
A FROG JUMPING IN
A LEAVING IN THE WATER

* 原語で詩を味わう喜び

元の一つの俳句から、こんなに違う3つの訳が出てくるということは、一つの言葉で書かれた詩を別の言葉にするというのはそう簡単なことではない、ということを示しています。だからこそおもしろい。だからこそ、この3つの訳でも表わしきれないほど豊かな元の俳句を日本語で味わえるのはありがたいことだと思えます。逆に英語の詩も英語だからこそ味わえるものがあるはずですから、できるだけ元の英語から直接それに接することができるようになりたいものです。

* お次は一茶

俳人の中でも小林一茶は「雀の子そこのけそこのけお馬が通る」や「やれ打^うな蠅が手をする足をする」など、私たちも子供のときから親しんでいます。一茶の句は素直に英語になりやすく、アメリカでも多くの画家が絵をつけて、本が出版されています。その生涯が紹介された絵本もありますし、現代の子供の生活が描かれていて、そのすべてに一茶の句が英訳されてついているという本もあります。次の句、あまり知られていませんので、英語の訳でまず読んで、元の俳句はどんなものなのかと考えるのもおもしろいかもしれません。

A single mat

松陰や

Beneath a pine tree

ござ
座一枚の

Makes a summer mansion. なつ座敷

* 蕪村の名句はどうか？

与謝蕪村は自身が画家でもあったので、見事に絵画的な俳句を多く残していますが、次のような挿絵をつけて英語で紹介されている元の句が何なのか、わかりますか。

Sun low in the west…
moon floating up in the east
flowers in shadows



これまた小学校でも習った「菜の花や月は東に日は西に」ですね。英語の1行目は「日は西に」に当たり、2行目が「月は東に」ですが、「菜の花」はどこにいつてしまったのでしょうか？英語では「花は陰の中」になってしまっています。菜の花といってもアメリカではなじみのない花なので、種類も特定せず、月と太陽の世界の壮大さを強調するために、さらに花は影に入ってしまったのでしょうか。「菜の花や」といったら、一本の花ではなく一面の菜の花です。蕪村の生きた当時、夜の照明用の菜種油を採るために、季節になると畑は菜の花で埋まりました。明治・大正を生きた詩人山村暮鳥に「いちめんのなのはな」という言葉が何行も続く「風景」と題する詩があります。英訳の詩についている絵のほうは、ユリ科の花のようで、しかも一群れが前面にあって、菜の花のようにずっと広がっているという感じではありません。これはある意味で誤解に基づいた解釈といえるでしょう。でも、間違っているというより、これほど形が変わっても、蕪村の句は名句として把握されているということが興味深いことに思われるのです。それは、文化が形を変えて、よその国に入っていくということのおもしろさと言えいいでしょうか。

Sonnet (ソネット)

* 大流行したソネット

「ソネット」は14行の詩で、日本の詩人、立原道造もこの形の詩を多く残しました。ただし、英語の場合は、14行という行数の枠組みだけではなく、韻律のほうでも厳しい縛りがあります。そもそも‘sonneto’はイタリア語で「小さな歌」を意味します。そもそもラテン語の‘sono’は「音を出す」という意味があり、音楽用語の‘sonata’（ソナタ）も同じ語源を持ちます。ソネットは14世紀のイタリアに始まりましたが、その名が示すように、もともとは音楽に合わせて歌われていました。特に Petrarca（ペトラルカ）という詩人によって多くのソネットが書かれ、これがヨーロッパ中に広まって大流行しました。ずいぶん後になりますが、19世紀になって、音楽家のリストが「ペトラルカのソネット」と題して、詩から受けたインスピレー

ジョンを元にピアノ曲を作曲しています。16世紀のイギリスにも入り、ここでもソネット形式は多くの詩人の心を捉え、Shakespeare は 154 もソネットを作りました。

*ソネットの厳しい韻の規則

先ほどソネットは韻律に激しい縛りがあるとお話ししましたが、その一つは韻です。ペトラルカは a-b-b-a/a-b-b-a// -d-c/c-d-c の形で書き、これをペトラルカ式、またはイタリア式と呼んでいます。イタリア語と英語では音の響きが違うため、シェイクスピアは、a-b-c-b/c-d-c-d /e-f-e-f//g-g の形を完成させました。これは、シェイクスピア式、またはイギリス式と呼ばれています。といっても、どういうことかわかりにくいですね。まず実際の作品を見てみましょう。

*シェイクスピアの^{おはこ}十八番

シェイクスピアのソネット 154 編中、有名なものは何篇かあるのですが、なんとといっても 18 番目のものが特にすばらしい作品です。まさに十八番と言えます。

Shall I compare thee to a summer's day?	君を夏の一日にくらべたらどうだろう。
Thou art more lovely and more temperate:	君はもっと美しく、もっとおだやかだ。
Rough winds do shake the darling buds of May,	五月のいとおしむ花のつぼみを荒っぽい 風が揺さぶり、
And summer's lease hath all too short a date:	夏という契約期間はあっというまに終わっ てしまう。
Sometimes too hot the eye of heaven shines,	天の太陽も、ときに、灼熱の光をはなつ けれど、
And often is his gold complexion dimmed;	黄金のかんばせが雲にかくれることだっ て珍しくはない。
And every fair from fair sometime declines,	美しいものはすべて、いつかは美を失っ て朽ちる。
By chance or nature's changing course untrimmed,	偶然や自然の変移が、美しい飾りをはぎ とってしまう。
But thy eternal summer shall not fade,	しかし、君が不滅の詩のなかで時と合体 すれば、
Nor lose possession of that fair thou ow'st;	きみの永遠の夏はうつろうことはない。
Nor shall death brag thou wander'st in his shade,	いま手にしているその美しさを失うこと もない。
When in eternal lines to time though grow'st:	死神が、やつはわが影を歩んでいる、と うそぶくこともない。
So long as men can breathe, or eyes can see,	人が息をし、眼が見うるかぎり、この 詩は生きる。

So long lives this, and this gives life to thee.

そして、この詩がきみにいのちをあたえる。

[高松雄一訳]

* 厳しく縛られるから書きたい、読みたい

先ほどの韻が規則どおり合っていることを、色分けして確認して見ましょう。この韻だけではなく、(韻だけでも複雑なので、省略しましたが) 各行の強弱も合わせなければいけないので、ソネットを書くのは大変だということが納得していただけたと思いますが、詩人というのは、そういう制約があるからこそ書きたくなるらしいのです。シェイクスピアのいたルネサンス期ほどの大流行はその後見られなくなりましたが、連綿と現在に至るまで、ソネットは書き継がれています。ぎゅっと14行の中に、複雑な思いを如何に盛り込むかに、詩人は心を砕いて、腕を振るうわけです。読む側からすると、それを如何にひもといていくか、ああも読める、こうも読めるという楽しみがあります。

* 詩を、愛を、捧げる相手は？

この詩はシェイクスピアが男性なので、女性に宛ててその美しさを讃えている、と読めたでしょうか。実はそうではなくて、自分の仕えている筋の若い男性貴族に宛てたものなのです。全154編の中に盛られている内容には流れがあって、このソネットの1つ前までは、誰かと結婚して、その美しさを子供へ、次の世代へと伝えてもらいたいと、訴えています。でも、この詩になると、男性が女性に捧げたと読んでもあながち間違いではありません。ソネットという厳しい形式の中で如何に詩人としての自分の腕を見せるかということが大事なので、実際がどうであったかというより、出来上がった作品の中でどれほど相手への讃嘆の思いが、そして究極的には、相手に捧げる愛が伝えられているかが重要になってきます。美を言うにあたってそれとかけ離れていると思われる金銭貸借関係の語を使ったり、聖書に言及して(12行目の「死神が、やつはわが影を歩んでいる、とうそぶく」というのは、旧約聖書の「われ死のかげの谷をあゆむとも……」から来ています) 詩の世界を広げたりと、さまざまな技巧を凝らしています。これは、日本でも平安朝に、「春の桜と秋の紅葉のどちらが勝るか歌に詠め」という課題に対して、歌人たちが頭をひねったのと似ています(これは「題詠」と呼ばれています)。

* 詩人の勝利

そしてなんとすばらしいことでしょうか、作者シェイクスピアの思いは今日まで伝わっています。この詩を読めば、これほど讃えられているのだから、相手はさぞや美しいのだろうと、作者の愛は強かったのだろうと、思われるからです。その愛の思いの強さ、そして詩を信じている思いの強さは、最後の1行、単語一つ一つがしっかりと発音されることから伝わってきます。全体は難しいところもありますが、ここは単語も単純なものですし、それぞれ一音節なので自分でゆっくり声に出してみても、その力強さを実感してください。

このように、シェイクスピア式のソネットは最後の2行が同じ韻を踏むことで、内容的にもまとまりを見せて終わります。

Concrete Poem (コンクリート・ポエム)

*まず見なくては

英語の 'concrete' は「具体的」ということで、「コンクリート・ポエム」は、詩の視覚化とも言うべきものです。ページの上に印刷された見え方を問題にします。ヴィジュアルな詩、グラフィック・アートとしての詩といってよいでしょう。ということは、説明を長々と聞くよりは、まず「見る」必要があります。

see
the
f
a
l
l
i
n
g
leaf
that lands on the ground

「ごらん、地面にたどりつく落ち葉を」という内容ですが、ここで 'falling' (落ちる) という単語をまさに散っている落ち葉のように表記することで、一枚の葉がはらりと落ちて地面に至る様を目に見える形にしています。

*モデルは昔にあり

コンクリート・ポエムが盛んに書かれるようになったのは、1950年代ですが、実ははるかに昔から、詩における「見た目」は、認識されていました。内容を眼にも訴えようとするもので、Shaped Verse (形象詩) とか Pattern Poetry (図形詩) と呼ばれて、ギリシア、ラテンの昔から、すでに試みられていました。イギリスでは、16世紀から17世紀にかけて盛んに作られました。次の George Herbert の詩はその1例で、惨めな人間の一人である自分も神に救われ飛びたいという希望が述べられています。古い英語が使われていますし、宗教詩なので難解かもしれませんが、タイトルに「羽根」とありますし、詩全体の形が翼の形をしていますので、詩人の思いが少しは伝わってくるのではないのでしょうか。このような形をしていない場合を考えると、詩形がかなりのヒントを与えてくれるのがわかります。

Easter Wings

Lord, who createdst man in wealth and store,

Though foolishly he lost the same,
Decaying more and more
Till he became
Most poor:
With thee
O let me rise,
As larks, harmoniously,
And sing this day thy victories:
Then shall the fall further the flight in me.

My tender age in sorrow did begin;
And still with sicknesses and shame
Thou didst so punish sin,
That I became
Most thin.
With thee
Let me combine,
And feel this day they victory;
For, if I imp my wing on thine;
Affliction shall advance the flight in me.

そうすると、訳すときもこの形に収めなければならないということになります。詩の翻訳もなかなか大変です。

* 眼が動く詩

次の Roger McGough の詩は '40.....Love' と題されていて、「40 代の愛」つまり中年の愛が描かれています。テニスで 'love' というのは零点のことで、つまりは「40 対 0」の試合を表わしていることにもなります。そう気がついてみると、この詩は読むときに左・右と眼を動かさなくてはいけなくて、それはまさにテニスの試合を見ているときに、ネットを挟んで動くボールを眼で追うようすそのものです。詩を読むことで眼を左右に動かし、それはまるでボールの動きを見て試合観戦しているようなものです。

40.....Love

middle	aged
couple	playing
ten	nis

Free Verse (自由詩)

* 縛られるのは嫌い

「ソネット」のところで、詩人は厳しい規則を守って詩を書くことにこそ喜びを感じるものだとお話ししましたが、もちろんそうでない人もいます。それから、同じ詩人でも、時には規則に縛られずに書きたいということもあります。20世紀になって、詩人たちは、長さや韻のことを気にしない詩を、どんどん書くようになりました。今ではこれが主流といってもいいほどです。何も規則がない、といえば簡単かといいますが、決してそんなことはありません。詩は言葉からできているのですから、自由詩を書くに当たって、詩人は自分の思うまま言葉が機能を果たすように、細心の注意を払って自分の詩の言葉を選びます。それまでも、規則に従った詩を書く一方で自由詩も書く詩人はいましたが、「自由詩」という呼び方をしていなかっただけです。「自由詩」というのは、19世紀の終わりごろフランスの詩人たちの間ではやった‘vers libre’ というフランス語を英語に置き換えて‘free verse’としたものです。

* 名前からして自由なカミングズ

実際の作品で、どれほど、どういう意味で自由なのか探ってみましょう。作者 e.e.cummings は、人名は大文字で始めるのに、ペンネームとしてこうして全部小文字にしてみました。ここにすでに自由な彼の精神が伺えます。

Buffalo Bill's	バッファロー・ビル
defunct	逝 ^ゆ けり
who used to	濡れたようにつややかな銀色の
ride a watersmooth-silver	駿馬に
stallion	またがって
and break onetwothreefourfive pigeonsjustlikethat	あっという間に吹っ飛ばしたもんだ、
	一二三四五枚の皿を
	Jesus
	すげえ
he was a handsome man	それにきりっとしていい男だった
and what I want to know is	そこで知りたいのは
how do you like your blueeyed boy	どう、あの青い眼の若いのが気に入っ
	たかい
Mister Death	死神さん

[亀井俊介・川本浩嗣訳]

* 眼にもとまらぬ工夫

バッファロー・ビルは実在の早撃ちの名人で、そのヒーローぶりは伝説化されています。その

すばらしさを表現するために、彼の馬を讃えて water+smooth+silver と 3 語を合わせるの
などお手のもので、one+two+three+four+five や pigeon+just+like+that (‘pigeon’ は
早撃ちの標的となる素焼きの皿、just like that は「やすやすと」の意) とつないでしまうこ
とによって、単語と単語の間に呼吸を置かせず、息をもつかせない早業が表わされています。
声を出して詠むなら一気に詠んでしまわないと、せっかくの感じが出ません。文頭でも大文字
にしなかったり、各行の初めを揃えなかったり、急に口語表現を入れたり (例えば、‘just like
that’)、質問なのにクエスチョン・マークを入れないことなど自由な精神に溢れています。そ
れでいて、各行の最初を揃えてはいないものの、逆に、文頭の位置がなかなか考えてあるし、
‘Bill’s(=Bill is) dead’ とわずに ‘Bill’s defunct’ という古語の荘厳さを用いて英雄への賞賛
の気持ちを込めるなど、細かい工夫があります。

注記

この他に、詩の形として、物語詩、バラッド、パストラル、ピラネルなどがあり、内容的には、ナンセンス
や謎々詩も扱いたいと考えているが、今回はひとまず、ここで置くこととする。

参考文献

英詩全般に関して

日本語のものも英語のものも、最終的にまとめる予定。

個々の事例に関して —— 言及された順にあげる

エドワード・リア作、柳瀬尚紀訳『完訳ナンセンスの絵本』(岩波書店、2003)

丸山一彦校注『新訂一茶俳句集』(岩波書店、2006)

『日本の詩歌 13 山村暮鳥 福士幸次郎 千家元麿 百田宗治 佐藤惣之助』(中央公論社、1988)

亀井俊介・川本浩嗣編『アメリカ名詩選』(岩波書店、1993)